
STEPS

サロフィ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

STEPS

【Nコード】

N2227P

【作者名】

サロフィ

【あらすじ】

とんとんとん。

ぼくはいつからこのかいだんをのぼっているんだろう。

この先には一体なにがあるんだろう。

長い長いかいだんを、ひたすらのぼってゆく「ぼく」と、途中で出会
う五人の人々の物語です。

とんとんとん。

ここは一体どこだろう。

ふと顔をあげると、前にも後ろにも長い長いかいだんが続いていた。ぼくは気がついたときからこのかいだんをのぼってるんだ。それがいつからだったのかは覚えていない。とにかくずっと前からだ。

とんとんとん。

もう何段のぼったのか全然分らない。どうしてぼくは、このかいだんをのぼっているんだろう。それすらも分らない。でもだからって、くだる気にもなれないんだ。どうしてだろう。どうしてもできないんだ。

とんとんとん。 たったった。

「どいてどいて！急いでるの！」

女の子が一人、後ろからぼくを追いこしていった。

「どうして君はそんなに急ぐんだい？」

ぼくは不思議に思っただけで彼女を引きとめた。すると彼女は楽しそうに笑いながら、くるりとこちらを振りむいた。

「なんでだろう？突然、がんばってのぼってみようと思ったの！」
それだけ言っただけで、女の子はまた同じように駆けあがっていった。

とんとんとん。 とろとろとろ。

「やあこんにちは。君は丁度良いペースでのぼっていくんだね」
次に出会ったのは、さっきの女の子とは正反対に、ゆっくりとのぼっていくおじさんだった。

ぼくはおじさんの隣にならんだ。

「そんなに遅いペースじゃ、みんなに抜かされてしまいますよ」

「いいんだ、ペースは人それぞれだから。結局みんな、たどり着く先は一緒だろうからね」

のんびりとした口調でおじさんは言った。がんばって下さいね、と声をかけた後ぼくはまた上へのぼり始めた。

とんとんとん。

それからしばらくしてから、ぼくはふと思いついた。

さっき出会った女の子もおじさんも、何かを目指すようにのぼっていたんだ。ということは、果てしなく続くこのかいだんの先に、何かがあるのかもしれない。

一体それはなんなんだろう？本当にそんなものがあるのかな？

たんたんたん。とんとんとん。

おや、どうしたんだろう。

見るとかいだんを反対におりてゆく男の人がいた。

「どうしてあなたは上へと進まないんですか？」

ぼくは心配になり、彼に声をかけた。

パシッ

「おれの事なんてほつといてくれ！」

のぼしたはずのぼくの手は、かわいた音を立てて振り払われてしま

った。

「もうおれなんてダメなんだ…いくらのおつても、終わりなんて見えてきやしない！」

彼は本当に苦しそうに叫んだ。ぼくの顔をみようとせずに、ただうつむいたまま。

「どうして…まだ分からないじゃないですか。どうして進むのをやめてしまったんですか？」

「ふん、このままのほり続けたって、どうせ何もありません。ただだつたらおれは引き返す方を選んだだけさ」

「でも下へ向かうのだつてそうとう時間がかかりますよ？」

ぼくはあわてて彼を引き止めようとした。でも彼はかまわずに、そのままだろうとした。

そのときだつた。

「あぶないっ…」

そのやりとりの間にバランスを崩した彼は、かいだんの外へと放り出された。

ぼくはその腕をなんとかつかみ、かろうじて落下を防いだ。ちらりと下を見ると、広がるのは不気味なくらい真っ暗な闇だけだつた。

ダメだ…このままじゃ二人とも落ちてしまう。

「ははは…丁度良い！このまま手を離してくれ、そうすれば一気に下へとおりられる！」

彼は嬉しそうに言った。でもぼくは、なぜか手を離してはいけな気がした。

「おい、手を離してくれ」

「いやです」

「お前にはおれがどうしようと思つた関係無いだろう？もうおれは疲れたんだ。さつさとおれを楽しんでくれ！」

「ダメです…そんなこと！」

しかし二人分を抱えるのは思つた以上にきつく、だんだんと腕がしびれていった。

「ふん…お前まで落ちてしまっぞ？このまま落ちてても良いのか？」

「それは…」

ぼくはどう答えていいか分からなかった。その間にも、ぼくの力は限界に近づいていた。

ガリッ

突然、彼がぼくの腕をひつかいた。

「いたっ…」

しまった、と思った時にはもう遅かった。

彼の体は一瞬宙に浮いたかと思うと、凄まじい速さで落ちていった。

「これでおれは自由だ！」

高らかな笑い声は、彼が見えなくなるまで続いた。

それはとても嬉しそうな声だった。

とんとんとん。

疲れた。もうどのくらいのぼったんだろう。いくら進んでも進んでも、かいだんの果てはやってこない。

さっきの男の人は一体どうなったんだろう。

少し下をのぞき込んでみた。相変わらず広がるのは闇ばかりだった。ぼくは自分があゝの闇に飲み込まれていく所を想像してみた。それだけでぞっとした。

でもだからといって、これをのぼり続けても意味があるのか全く分からなかった。このまま進むのは本当に正しいことなのか。

とんとんとん。ゆたゆたゆた。

「さて、ここらで一休みしようかね」

どっこらしよ、とかいだんの隅に腰を下ろしたのは、仲の良さそう

な老夫婦だった。

「こんにちはおじいさん、おばあさん。とてもゆっくりとのぼっていくんですね」

「ああ、わしらは若い頃に十分がんばったからねえ。最近はどうもつとこの調子さ」

あの、一つお聞きしても良いですか、とぼくはずっと気になっていたことを尋ねてみた。

「この先に何かがあるのかだって？さあねえ。実はわしらも知らんのだよ」

「知らない？ならなぜこのかいだんをのぼり続けてきたのですか？」

「わしらも君と同じさ。何かにたどり着くと信じてただひたすらのはづいていたら、ここまで来ただけなのだよ」

そう言つて、にこりと彼らはお互いにほほえみ合った。

「だが、もうすぐわしらはそこへたどり着けそうじゃない」

ぼくは驚いた。とつさに上を見上げたが、かいだんの終わりは見えつきそうもない。

「もちろんそれはわしらの終着点さ。君は若いんだからまだまだ上を目指すことができる」

「それは…どういふことなんですか？」

「それを考えるのは君自身さ。さあ、もうおゆき。こんな所で立ち止まらずにね」

おじいさんはぼくに笑いかけ、静かに手をふった。

「それからね」

おばあさんがぼくに付け加えた。

「どんなにつらくなつても、諦めないことさ。さもないと二度と答えにはたどり着けないよ」

ぼくは老夫婦の言つたことがよく分からなかった。でも、とにかく上へと進めばたどり着くものがあると思えた。

さつきまであつた疲れが急にふつとんだ気がした。

とんとんとん。……………。

ん？誰かがうずくまっている。

その姿になんだか見覚えがある気がして、ぼくはその人に近づいてみた。

「君は……」

ぼくは驚いた。目の前にいたのは一番はじめにぼくを追いこしていった、あの女の子だった。もうずいぶん先に進んでいると思っていたのに。

「君…そんなところに座りこんでどうしたんだい？」

ぼくは、ぼんぼんと軽く彼女の肩をたたいた。でも彼女は黙ったまま、ほとんど動かなかった。さっきはあんなに元気に笑っていたのに。

「……痛い」

ぼつりと女の子は突然つぶやいた。

「痛い？けがでもしたの？」

「ううん、でもね……ここが痛い」

そう自分の胸をとんとんとつつく彼女は、なんだかとてもくたびれて見えた。

「わたし……なんであんなに急いでたのかな。もう一步も動けなくなっちゃったよ」

彼女はゆっくりと目を閉じた。ぼくは彼女がああ男のように落ちてしまふんじゃないかと怖くなった。このまま彼女をここに置いてはいけないと思った。

「ねえ、ぼくと一緒にのぼろうよ」

「え？」

女の子は驚いたように顔をあげた。でもまたすぐにため息をつき、下を向いてしまった。

「……どこまで進んだって、きつとこのかいだんに終わりなんて無

いわ」

「本当にそうかな」

彼女はまた顔をぼくに向けた。

「ぼくはそうは思わない」

その子は、はつきりとそう言い切った。ぼくを見て、さっきよりも大きく目を開いた。

「ぼくらはまだまだ進み足りないだけなんだよ、きっと」

「まだまだって……それじゃあ、いつ見えてくるの？」

「ぼくもその答えを探したさ。ても結局分からなかった」

ぼくはまっすぐ彼女を見つめ返して言った。

「ただ一つ気づいた事がある。いつまでも立ち止まってちゃダメなんだってね」

「……」

「一歩ずつでもいい。それ続けるのと続けないのでは全然ちがうんだよ。迷ってる間に、一歩でも進んだ方が良いだろう？」

「でも……途中でまた動けなくなっちゃうかもしれないわ」

「それならばくが君を起こしてあげるさ。つらいときには隣で支える」

ぼくはあの老夫婦を思い出した。二人は、お互いに信じてのぼり続けてきたんだ。あの二人が言っていたことが、なんとなく分かった気がした。

「ぼくと一緒に進もう」

ぼくは彼女に手をさしだした。彼女は少し戸惑いながらも穏やかな笑みをその顔に浮かべた。

ぼくらは新しい小さな……本当に小さな一歩を踏み出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2227p/>

STEPS

2010年11月30日10時35分発行